

HPに「ミニ美術館」を作るにあたって（1/3）

HP 管理室

目次

1. はじめに
 2. 『聖母マリア』と『女神ヴィーナス』
 3. 『裸のマハ』と『着衣のマハ』
 4. オダリスク
 5. 「神話ヌードはOK、現実ヌードはNG」のダブルスタンダード
 6. ルノアール
 7. オフィーリア
 8. 美女の容姿
 9. おわりに
-

1. はじめに

IT 技術の進展・普及もあって、今や規模の大きい「インターネット美術館」があります。例えば、「Google Arts & Culture」には、世界 70 か国から 1,200 以上の美術館、博物館、ギャラリー、協会が参加しています。そこには、個々の作品展示だけでなく、ストリートビュー機能で館内が歩ける美術館なども多くあります。特定の美術館、画家、作風、年代などでの作品の鑑賞や調査をしたい時に、これほど便利なツールはありません。また、インターネット上には、種々の解説が付いた記事（or 私設の美術館）も多くあります。

しかし、疲れた時に部屋で聞こえてくるバックグラウンド音楽のごとく、“バックグラウンド” 絵画を PC 画面上で流すには仕掛けと工夫が要ります。音楽や絵画には、人それぞれに好みがあり、最終的にはそれぞれに合わせたチューニング機能が必要です。ここでは、HP を訪問してくださった同窓仲間の皆さんが、ゆったりとくつろいだ時に「ちょっと覗いてみるか」程度のものとして「ミニ美術館」を作ってみることにしました。作品数が少ないのが致命的かとも思いましたが、例えば『モナリザ』を何度見ても飽きることはないのも、先ずは良い作品（HP 管理室の独断）を集めることにしました。ただし、作品は、著作権の切れたものやフリーのものに限られます。皆さんには流れてくる作品を予測させないために、流すスライドはランダム順の自動送りにしてあります（マウスをスライド上に乗せたり外したりすることにより送りの一時停止と再開ができます）。

展示作品のテーマは「美」としました。ただし、例えば「美女」における“美”の判定基準は、制作年代当時の基準になっており、現在とはずれがあるものもあります。「美女」は、どの年代においても画材に好んで取り上げられており、作品が集めやすい分野です。HP「ミニ美術館」では、これらの“美”作品がランダムに流れていきますので、美に厳格な（許容範囲の狭い？）方は、あまりくつろげないかもしれません。作品を集めていく過程の中でいくつかの興味深い話題を知り、少し調べましたので紹介します。既に、ご存知のことが多々

あるかと思います。取り上げた作品の話題は、おおよそその年代の古い順になっています。

2. 『聖母マリア』と『女神ヴィーナス』

美しい絵画として先ず思い浮かぶのは、『モナリザ』、『聖母マリア』と『ヴィーナスの誕生』です（図 1-3 参照）。いずれも美術の教科書でおなじみのもので、ルネサンス盛期（15 世紀末から 16 世紀初頭）の作品です。図 1 の『モナリザ』（製作 1503～19 年頃）は、レオナルド・ダ・ヴィンチの作品です。図 2 は、ラファエロ・サンティの『小椅子の聖母』（製作 1514 年）です。彼は、聖母マリアと幼子キリストを描いた聖母子作品を数多く残したことから「聖母子の画家」と呼ばれています。図 3 は、イタリアの画家サンドロ・ボッティチェッリの作品『ヴィーナスの誕生』（製作 1483 年頃）です。女神ヴィーナス（アプロディーテー）が、成熟した大人の女性として、海より誕生し出現した様が描かれています。女性は全裸であり、“**古代ローマ以後において初めて絵画史上に表れた全裸像**”です。



図 1 『モナリザ』（1503～19 年頃）
レオナルド・ダ・ヴィンチ



図 2 『小椅子の聖母』（1514 年）
ラファエロ・サンティ



図3 『ヴィーナスの誕生』(1483年) サンドロ・ボッティチェッリ



図4 『春(プリマヴェーラ)』(1482年頃) サンドロ・ボッティチェッリ

サンドロ・ボッティチェッリには、『春(プリマヴェーラ)』(製作1482年頃)(図4参照)の作品も有名です。中央の木々が作るアーチを背景として立っているのが女神ヴィーナスです。多くの評論家が、庭に神話の人物がまとめて描かれているこの絵を、みずみずしく

茂る春の成長の寓意（アレゴリー）であるとしています。また、プラトニック・ラブの極致を描いているという説もあります。この絵には、500 種類の植物と 190 種類のいろいろな花々が描かれており、その内の少なくとも 130 種類は、はっきりと花の名前が判るそうです。その登場人物や解釈に関しては、「世界中で、もっとも議論的になり、もっとも言及される絵画のひとつ」と言われています。

サンドロ・ボッティチェッリの『ヴィーナスの誕生』と『春（プリマヴェーラ）』の女神ヴィーナスには、モデルがいたとされています。イタリア・フィレンツェに「麗しのシモネッタ」と詠われた絶世の美女“シモネッタ・ヴェスプッチ”です（図 5 参照）。輝く金髪と情熱的な瞳、スラリとしたおやかな肢体がたとえようがないほど美しく、男女関係なく出会った人々の心を捕らえて甘美な気持ちにさせる女性でした。彼女は商人マルコ・ヴェスプッチの夫人であり、メディチ家の貴公子ジュリアーノに「永遠の恋人」とも呼ばれました。彼女は、フィレンツェの人々皆から慕われていましたが、1476 年に尚早な死（23 才；肺結核）を迎えました。市民の皆が涙したと言われています。ダ・ヴィンチのデッサン画「Woman's Head」（図 5(c) 参照）は、葬儀中の彼女の美しい顔を描いたのではないかとされています。また、彼女の死からおおよそ 7 年後と 9 年後にボッティチェッリがそれぞれ有名な前述の『春（プリマヴェーラ）』（図 4 参照）と『ヴィーナスの誕生』（図 3 参照）を描いており、そこでのモデルはシモネッタだと言われています。ピエロ・ディ・コジモも彼女が亡くなってから数年後に彼女の肖像画（図 5(b) 参照）を描いています（彼女が無くなった当時、彼は未だ 14 才であり、異論もあります）。

ボッティチェッリの『ヴィーナスの誕生』の影響は大きく、400 年ほど後のウィリアム・アドルフ・ブグロー、アレクサンドル・カバネル、ジャン＝レオン・ジェローム、オディロン・ルドンなどが同題の絵画を描いています（図 6 参照）。



(a) サンドロ・ボッティチェッリ (1475-1480 年頃)



(b) ピエロ・ディ・コジモ (1490 年)



(c) ダ・ヴィンチ (1476 年)

図 5 シモネッタ・ヴェスプッチの肖像



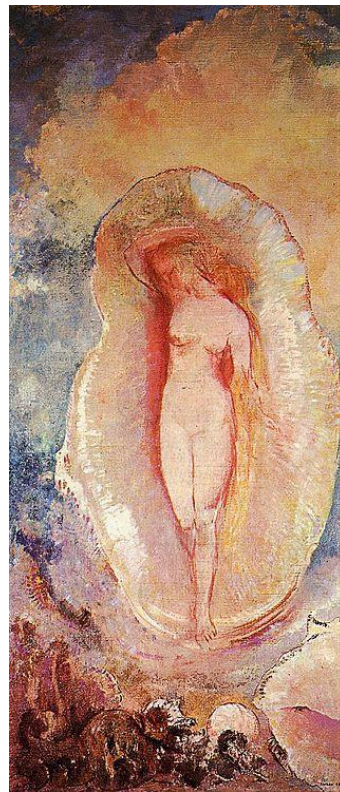
(a) ウィリアム・アドルフ・ブグロー
(1879 年)



(b) アレクサンドル・カバネル
(1863 年)



(c) ジャン＝レオン・ジェローム
(1899 年)



(d) オディロン・ルドン
(1912 年)

図 6 ボッティチェッリの『ヴィーナスの誕生』と同名の絵画を描いた画家たち

『ヴィーナスの誕生』におけるヴィーナスのポーズは、当時発見された『恥じらいのヴィーナス』(図5(a)参照)タイプの古代彫刻から得たものだそうです。八頭身の上、「**コントラポスト**」(右脚に体重を乗せて左脚をわずかに後方に置き、逆S字形の正中線[身体を中心を走る線]を生み出すポーズ)によって安定していながら動きを感じさせています。髪もなびいています。このポーズは、この後、ヨーロッパの彫刻及び絵画における人体表現の基本となって今日まで受け継がれています。そして、ボッティチェリが描いたヴィーナスは、首は現実にはあり得ないほど長く、左肩の傾きは解剖学的にあり得ない角度をしています。美を強調するための描写で、厳格な古典的リアリズムとは一線を画しています。

一方、ギリシャ彫刻史上初めて女性の等身大裸体像が造形されたのは、紀元前4世紀中頃ととても古く、アッティカの彫刻家プラクシテレスデレス(生没年不詳)が作製しました。この作品は現存していませんが、原作が存在していたローマ時代にその模刻(ローマン・コピー)が多数制作されました。その中で、最も忠実なローマン・コピーとされ、原作本来の特徴をよく表しているとされるのが、ヴァチカン美術館の『クニドスのヴィーナス(コロナのヴィーナス)』(図7(a)参照)です。そのオリジナルと複製は *Venus Pudica* (恥じらいのヴィーナス) 型とも呼ばれ、右手で陰部を隠しているのが特徴です。ここから派生した型(右手で胸を、左手で陰部を隠すポーズをしているもの)として、『メディチ家のヴィーナス』(図7(b)参照)や『カピトリノーのヴィーナス』(図7(c)参照)があります。



(a) クニドスのヴィーナス (b) メディチ家のヴィーナス (c) カピトリノーのヴィーナス

図7 『恥じらいのヴィーナス』像

世界的によく知られた「ヴィーナス」の代表的彫像として、『ミロのヴィーナス』（図 8 参照）があります。これも教科書などでおなじみです。制作年代は、前 2 世紀末の古代ギリシャ時代ですが、前 4 世紀の古典期の作品を模したものと言われています。両腕を失った状態で発掘されており、原形では両腕がどのようなになっていたかに関心が掻き立てられます。さまざまな芸術家や科学者が欠けた部分を補った姿を復元しようと試みていますが、現在のところ、定説と呼べるほど成功しているものはありません。アドルフ・フルトヴェングラーによる復元像（図 9 参照）では、右手は手前に出て中央よりにのばして下げ、左手は前に伸ばしてリングらしき物を掴んでいます。



図8 ミロのヴィーナス



図9 フルトヴェングラーによる両腕復元した『ミロのヴィーナス』像

絵画における全裸像は、前述のボッティチェルリの『ヴィーナスの誕生』から始まりました。そして彼よりも30年ばかり遅く生まれて盛期ルネサンスの巨匠となるジョルジョーネは、一人の裸婦を立像でなく画布の対角線一杯に横たえた『眠れるヴィーナス』（図 10(a) 参照）を描きました。ただ一人の裸の女性を主題に選んだことは絵画史上の大変革となり、この作品は近代美術の出発点であると考えられています。作品「眠れるヴィーナス」はジョルジョーネの存命中には完成せず、風景と空は、後に『ウルビーノのヴィーナス』（図 10(b) 参照）を描いたティツィアーノが完成させました。いずれのヴィーナスも、左手は陰部を隠しており、図 7 の『恥じらいのヴィーナス』ポーズが採用されています。



(a) 眠れるヴィーナス (ジョルジョーネ) (1510 年) (b) ウルビーノのヴィーナス (ティツィアーノ) (1538 年頃)

図 10 『眠れるヴィーナス』と『ウルビーノのヴィーナス』